“この人に学ぶ”

第11回　松永安左エ門

全管連　技術参与　小泉智和

「電力の鬼」として知られ、戦後の民間９電力体制*の生みの親でもある松永安左エ門。長崎県壱岐の島出身で、明治から昭和にかけて電力業界で活躍した大実業家です。

＊現在は、沖縄を含め10電力となっています。

美術コレクター、また〝耳庵（じあん）〟の号を持つ茶人としても知られています。

戦後、生存者叙勲が復活した際、最初の叙勲者に内定しましたが、「人間の値打ちを人間が決めるとは何ごとか！」と激高し、受賞を拒否します。周囲の説得で、不本意ながら叙勲を受けることは了承したものの授与式は欠席しました。逝去した際に、遺族は松永の意思を尊重し、一切の栄誉・栄典を辞退しました。

お葬式もしない、法名もなし、お墓はつつましやかな小さなものです。波乱万丈な人生を送ったスケールの大きな方ですが、私的には質素な方だったようです。

（Yahoo画像より）

○松永の生涯（前半生）

明治８年（1875）、長崎県壱岐の商家・２代目松永安左エ門の長男として生まれました。家は、酒造業、呉服業、海産物取り扱いなど手広く事業を営んでいました。

幼少のある時、福沢諭吉の「学問のすすめ」を読み、感銘し、明治22年、東京へ出て慶應義塾に入学しますが、明治26年、父の死で帰郷、家督を相続し、３代目安左エ門を襲名します。

思いもあり、21歳の時再び慶應義塾

に戻り、福沢諭吉の朝の散歩のお供をするようになり、大きな啓発を受けます。24歳、学問への興味が湧かなくなり、諭吉から「卒業など大して意義はない。そんな気持ちなら社会に出て働くのがよかろう」と言われ中退。

中退後は、福沢諭吉の娘婿・福沢桃介の紹介で日本銀行に入行しますが、１年で退職。その後、桃介と一緒に「福松商会」を立ち上げ神戸や大阪で材木商や石炭業を営みます。33歳の時、桃介の影響で始めた相場で失敗、自宅の火事もあり、丸裸になってしまいました。

壹岐・生家跡の松永安左エ門記念館
（ながさき歴史・文化ネットより）

○電力の鬼として

破産した松永は、福沢桃介と協力して、明治42年に福博電気軌道（西鉄の前身）を設立します。これを契機に電力事業に関わるようになり、九州内の電力会社設立・合併に取り組んでいきます。

大正10年には、桃介の名古屋電灯と関西電気を合併させ、名古屋関西電気に、さらに九州電灯鉄道と合併させ東邦電力を立ち上げ、東京へ進出します。

九州・近畿・中部で勢力を持った東邦電力は、配下の東京電力と当時東京で独占状況だった東京電燈*とで需要家争奪の「電力戦」を繰り広げます。結果、昭和３年、合併して新たな東京電燈が設立されました。

＊東京電燈：明治16年、渋沢栄一、大倉喜八郎らによって設立された日本初の電力会社

その後、電力の「民有民営」の必要性を強く訴えますが、昭和14年、電力国家管理案が議決されてしまいます。これに対し、松永は講演会の席上で軍閥に追従する官僚たちを「人間のクズ」と発言し、大問題となり、生命を狙われる身ともなりました。

戦争の激化により、電気事業は国家管理下に置かれ、日本発送電会社と９つの配電会社による体制となりました。これに伴い東邦電力は昭和17年解散、松永は所沢の柳瀬荘で、昭和21年からは小田原で茶道三昧の日々を過ごすようになりました。

それでも戦後、吉田首相の下で「電気事業再編成審議会」会長に抜擢され、９電力体制による分割民営化を実現させました。晩年は、電力中央研究所設立や東名高速道路・名神高速道路の計画、日本

最大となるダム・沼田ダム計画などに関与しました。

昭和46年に死去、95歳でした。

○松永の名言

若い時は、石炭屋、ブローカー、相場に手を出すなど好き勝手な人生。女道楽もしましたが、電力事業に関わるようになってからは面目躍如、人に物申す人物となりました。その名言のいくつかを紹介しましょう。

・意気地さえあれば、失敗などということは人生にないと思う。そして、失敗によって人は鍛えられるのだ。

・ひとつの力を養ったら二の力を出せ、二の力を得たら三の力を出せ、人間は決して小成に甘んじてはならない。だが、小成を馬鹿にしてはならならぬ。

・同じものでも考え方ひとつ、やる奴はやるように考えるし、へこたれる奴はへこたれる方へ考えてしまう。

・どうせ人間、欠点もあれば長所もある。欠点はある場合は長所、長所も欠点になる。幸運は幸運にあらず、不運も幸運に通ずと思うからいっこうに気にならない。

・世の中には人を馬鹿にしたがる奴と、馬鹿にされることを気に病む者とがある。いずれも馬鹿な話で、世渡りには、人を馬鹿にしてもいけないし、馬鹿にされても馬鹿にならない、その心がけが大切だ。

○今日の電力事情を見る

日本の発電電源は、石油、石炭、天然ガス、原子力、水力、再生可能エネルギ（風力、地熱、太陽光など）ですが、1965年頃までは水力、1973年のオイルショックまでは石油、その後は石炭とLNG、そして原子力が担ってきました。2011年の東日本大震災以降は、原子力発電の割合はほぼゼロになり、その減少分の大半はLNGがカバーしています。

2017年時点でLNG、石炭、石油による火力発電は80.8％（大震災前は61.7％）、水力は8.0％、再生エネルギーは8.1％（震災前は1.1％）、原子力3.1％となっています。

現在運転中の原子炉は８基で、他の25基は定検停止中（６月末）になっています。

菅首相は、「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする。カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」と述べていますが、よろしくないのは原発に頼っている点です。今、求められているのは、原発や火力に頼らない再生エネ主力と省エネ、そして大気汚染物質が発生しない水素発電の技術開発促進だと思うのですが…。

○松永ゆかりの地巡り

松永安左エ門ゆかりの地は、長崎県壱岐、東京、大阪、神戸、福岡・博多、名古屋、所沢、小田原と数多くあります。

生誕地壱岐には、「松永安左エ門記念館」がありますが、ちょっと遠いので、九州へ行った折に立ち寄ってみると良いと思います。

電力にまつわる資料を見学するなら東電の「電気の資料館」（横浜市鶴見）が良いのですが、現在、東日本大震災の関係で広報活動自粛中により一時休館中（再開未定）です。

三田の慶応義塾大学は、安左エ門が青雲の大志を抱いて入学したが中途退学してしまった学校。それでも縁あって、埼玉県志木にあった東邦電力の東邦産業研究所東京試験所の広大な土地は、戦後慶應義塾に寄付されました。現在は慶應義塾志木高校となっており、校門近くには安左エ門の胸像が建立されています。

志木高から４㎞ほどの距離の地には、柳瀬山荘（所沢市：住居として使われていた建物〝黄林閣（おうりんかく）〟〈国重要文化財〉や斜月亭（しゃげつてい）、久木庵（きゅうぼくあん））が、また古刹平林寺（新座市：松永夫妻の墓所、松永が寄進した山門の仁王像）もあります。

小田原市は終の棲家〝老欅荘（ろうきょそう）〟〈国登録有形文化財〉があり、現在は「松永記念館」となっており、邸内の茶室〝葉雨庵（ようあん）〟も国登録有形文化財になっています。

平林寺山門（平林寺公式ガイドより）

↑松永の墓（平林寺）

管工事組合の皆さん、その家族の方が東京へ来られたら、小泉がご案内します。

申し込み：全管連事務局：無料（交通費はご負担ください）

＊参考資料

「松永安左エ門」自叙伝

松永安左エ門著　図書センター

「電力人物誌」

満田　孝著　都市出版

次号（最終回）では、松下幸之助をご紹介します。